

老上中学校
学校だより
H28(2016).6.28

考動する老中

校訓
「自主・創造」
文責 辻本 長一

交歓スポーツ大会が開催されました

5月31日(火)、初夏を感じさせるほどの青空と輝く太陽のもと、滋賀県中学校交歓スポーツ大会(陸上競技の部)が、大津市の皇子山陸上競技場で開催されました。この大会は、県内の特別支援学級や特別支援学校の生徒が集まり、陸上競技をとおして各校生徒相互の交流を図り、体力・気力を高めていこうとして実施されるものです。

当日は本校からも特別支援学級の生徒が参加しました。私は、一部のみの応援となりましたが、生徒たちが緊張した面持ちで真剣に競技に参加する姿や、仲間の出番をみんなで確かめ声援を送る姿にふれることができました。以下、個々の生徒たちの様子についてお知らせしたいと思います。

- 優勝はできなかったものの、集中力を高め、精一杯の走りができた。
- 昨年までと同様の種目に出場し、いずれも今年の記録を上回ることができた。
- 競技への参加はもちろんのこと、他校の生徒と仲良く話をするなど交流できた。
- 大会をとおして、普段あまり関われない特別支援学級の別の学年の生徒と話ができた。
- 本番直前まで何度も練習して、真剣に参加できた。
- 苦手な競技に参加して、自分なりの作戦を考えて臨むことができ、他の生徒の競技もきちんと観ることができた。
- いやな気持ちがあったが、周りの励ましを受けながらしっかり頑張ろうとしていた。



また、参加できなかったものの、この大会にかかわって自分と向き合いながらいろいろと考えがばらばらとした人や、友だちの話を聞いて次の大会への思いをはせている人もいます。人のがんばりは、見える部分と見えない部分がありますが、他の人には見えない部分や周りの人に見落とされてしまう部分も多いのではないのでしょうか。そうしたところを意識しながら、学校としても生徒を支援していきたいと考えています。

さて、10年近く前から法律の改正により「特殊教育」は「特別支援教育」として実施することになりました。従来の「特殊教育」が障がいの種類や程度に応じて特別な場で手厚い教育を行うことに重点が置かれていました。それに対して、「特別支援教育」は障がいのある子ども一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導・支援を行うことに重点が置かれており、通常の学級に在籍する子どもも含め、様々な子どもたちの教育的ニーズに対応した教育を行うことになりました。

しかし50年以上も前に、こうした特別支援教育に通じる考え方をしていた方が滋賀県におられます。滋賀県初の知的障がい者施設「近江学園」を創設し初代園長となられるなど、日本の障がい者福祉を切り開いた糸賀一雄先生は、障がいのある人も分けへだてなく共に生きることでできる社会こそ「豊かな社会」であると主張しました。

また、人間の精神発達というものは、年月とともに次第に上へ伸びていくばかりではなく、あらゆる発達段階で豊かな内容を持つように広がっていき、(その横軸の発達は無限であり)その発達とは何かといえば、かけがえのないその人の個性である、と述べておられます。

老上中学校では、一人ひとりのもつ無限の力を最大限に伸ばせるよう、あらゆる活動をとおして、いろいろな側面から子どもたちの良さを評価し、すべての生徒がそれぞれの違いや良さを理解し認め合えるよう取り組んでいきます。ご家庭や地域におかれましても、子ども一人ひとりの可能性を大切に、子どもたち相互の交流についても温かく見守っていただきますようお願いいたします。



自分たちにできることは……

～関心を寄せ、「考動」しよう～



熊本地震で被災した方々への支援のため、6月13日(月)から1週間、生徒会の企画のもと学校や南草津駅において募金活動を行いました。募金活動をした生徒会の皆さん、そして募金をしたり協力したりした皆さん、ありがとうございました。正確な募金総額は、後日生徒会から正式に発表されますが、相当な額の募金をいただいたようで、生徒会の皆さんと担当の先生で責任をもって熊本に送っていただきます。

熊本地震のような災害で被災した人々に、私たちができることはどのようなことがあるのでしょうか。日本だけでなく、世界に目を向けると、今なお紛争が続く難民となっている人が多くいます。また、貧困に苦しみ、その日を生き延びるのが精一杯という生活をしている人もかなりいます。

私は、およそ15年前、中米のグアテマラという国で仕事をしましたが、その国では、住む家がなく貧困に苦しみ、交差点で止まる車のところに行っては車の窓ふきをしたりぼろぼろの新聞を売ったりしてお金を稼ごうとする小学生くらいの子供たちを多く見かけました。新聞やテレビなどで見聞きしていたものの、目の当たりにしたときの衝撃はいまだに鮮明に覚えています。

今回、生徒会で募金活動をした期間には、生徒会の皆さんがお昼の時間に、被災されている状況を放送で伝えたり、新聞報道された記事を見つけ、その内容を各学級に掲示をしたりして全校生徒で共有しました。たいへん意義あることだと思います。なぜ行動を起こすのか、行動の原点をみんなで共有することは実に大切なことです。

世界的な問題に対して、あるいは国内や身のまわりで起きた問題に対して、一人のできることは小さな事かもしれませんが、だからと言って何もしなければ何も生まれません。まずは一人ひとりがそうした問題に関心を寄せ、自分の気持ちを話したり意見を聞いたりすることではないでしょうか。逆に、無関心は同じ世界で同じ時を生きるつらい立場にある人を見捨て、問題をさらに悪化させることにさえる、といっても過言ではないと思います。

5月27日(金)には、エコー委員を中心に有志の皆さんも含めて80名もの生徒が、ごみゼロ運動として、学校周辺のゴミ拾いを行いました。時間とともに、隅々に目を行き届かせてゴミ拾いをする様子が見られました。一見ごみがないように見えても、草むらや道路の隅をよく見るとごみが見つかることが多かったようです。

こうした機会に活動に参加すること、あるいはごみ問題や環境について考え、友だちと話してみることで、そうした一人ひとりの小さな「考動」が、誰もが住みよい社会をつくっていくのだと思います。



あいさつ運動をとおして、地域の皆さんとの歩みを感じます

毎朝、私はほんの20分程度ですが、生徒の皆さんを校門付近であいさつをして迎えています。4月より5月、5月より6月と、皆さんが元気よくあいさつをする姿と接し、一日の元気をもらっています。毎月8日には、夢街道「あいさつ通り」の歌とともに、生徒会の皆さんのあいさつ運動が展開されています。地域の方々とともにあいさつを交わし合う姿をとおして、この老上に「あいさつから始まる学校づくり、家庭づくり、地域づくり」が根付いていることを実感しています。

老上公民館(市民センター)から老上小学校、老上幼稚園、老上中学校周辺の通学路を「あいさつ通り」と命名し、毎月8日の「愛の声かけ」あいさつ運動の活動が開始されたのは23年前の平成5年12月。今年度は小学校が分離しましたが、これからも老上全体でみんなの気持ちを合わせ、この活動を通して、より強い絆で結ばれた地域、学校をつくっていかうではありませんか。



推進友の会
シンボルマーク
(H6. 6. 12 制定)

